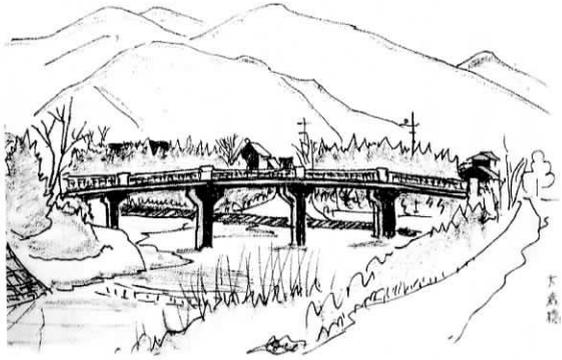


郷土の人物



種鶏改良に一生を捧げた

石井 東 一



明治三十九年（一九〇六）〜昭和四十年（一九六五）。中矢原の石井広一の長男として出生。大歳小学校高等科卒業、父の後を継いで養鶏と農業に専念する。しかし、病のため右足大腿部切断という悲運に見舞われ、松葉杖という不自由な体で一生を独身で通しながら、種鶏改良に打ちこんだのである。

ところで、大歳地区での養鶏は、大正の終りごろ（一九二五ごろ）平川和四郎（岩富）が白色レグホンの多産性に着目し、孵卵器により雛を孵化して分譲したのが始まりである。石井広一・石津富蔵（中矢原）らが飼育を始め、企業としてとりあげられるようになった。

終戦後、経済回復と食生活の改善が進むなかで、大歳の養鶏事業は飛躍的に進み、昭和二十四年二月「大歳養鶏農業協同組合」が設立され、初代組合長に石井東一（中矢原）が就任する。優良種を頒布して事業を広め、自身も養鶏に専心した。その努力が実を結び、昭和三十二年度の農林省の産卵能力検定において、石井東一は一〇羽一群の年間産卵個数三六二四個、産卵総重量二〇万五七八一・五グラムという記録をたて、産卵個数で全国第一位（世界新）を達成し、農林大臣賞を受けた。この産卵能力検定には、大歳養鶏組合からも多くの人が参加しているが、なかでも石井西二・石津浩・田中熊太郎・綾木勝馬・杉山清支・林正二などが立派な成績をあげている。こうして、昭和三十三年の大

歳地区組合員の飼育総数は一万五〇〇〇羽を超えた。

このように、組合員の中から多くの好成績者を出すことができたのは、ひとえに戦中戦後の飼料不足と悪条件の中で、優れた種鶏の確保と改良を続け、その種鶏をおしみなく分与した石井東一の功績にほかならなかつた。日本一の記録達成の後、山口県から表彰の打診を受けながら固辞したという話是有名で、その人柄がしのばれる。昭和四十年没、享年五九歳。

第二代組合長は、弟の石井西二（元海軍少佐）で、兄と共に養鶏に専念し、組合長としてその発展に尽力して、大歳養鶏を飛躍させた。だが、やがて林兼産業などの大手企業が参入し、昭和五十年ごろから大歳養鶏は衰退した。

社会運動家

石村 英雄



明治三十六年（一九〇三）〜昭和三十八年（一九六三）。大歳村黒川市に生まれ、山口高等学校から東京帝国大学経済学部経済学科を卒業（大正十五年）した。昭和二年（一九二七）に関東出版社俸給組合、東京一般俸給組合（昭四）の組織部長を務め、労働組合運動に挺身する。このころ東京市議会議員選挙運動のピラ貼布で治安維持法に触れるなど、積極的に活動した。

のち、山口市議、山口県地方労働委員、内外商業新報社記者、山一燃料(株)社長などを務め、日中文化研究所理事となる。昭和二十八年(一九五三)衆議院議員選挙に立候補して初当選(社会党)、以来、連続四期を務めた。その間、日本社会党政策審議会財政金融委員長・塩業対策特別委員などを歴任し、本県における戦後の社会運動界の草分け的存在として活躍した。

昭和三十八年四月二十四日没。享年六〇歳。(写真は朝日新聞社提供)

トンネルで水を引いた

伊藤 五兵衛

生没年不詳(江戸後期の人)。朝田村(高井)の給領庄屋。高井から勝井一帯の田に灌漑かんがいしていた「郷之尾堤」は、背後の山が狭く少しの日照りでも水が不足して村民は困っていた。これを見かねた庄屋の伊藤五兵衛は、何とか村民の苦勞を助けようと、一山奥の法満寺の谷川から水を引き込むことを考えついた。文化十二年(一八一五)のことである。そこで息子の助左衛門と親子二人の力で、取水路を造り、山に三〇メートル余のトンネルを掘り抜く難工事に取り組み、通水に成功して村民から感謝された。

今も残る文政六年(一八二三)建立の顕彰碑が、その功績を物語っている。(本文一三〇ページ参照)

逆境に耐え抜いた日本画家

兼重 暗香



明治五年(一八七二)〜昭和二十一年(一九四六)。明治五年三月十七日、兼重慎一(萩藩士)の末娘として矢原村中矢原(山口市矢原)に生まれ、本名を梅子といった。母は山口の河北家の出である。五歳のとき子守の不注いで脊髄骨を痛め、その後小児性脊髄神経麻痺を患い、全く歩行の自由を失った。父慎一は、大道村切畑に生まれ、萩明倫館で文武を修め、天保十一年(二八四〇)村田清風の抜てきを受けて右筆座から政務座と幕末動乱期の藩政にかかわり、慶応元年(二八六五)藩論が討幕に統一されると、大村益次郎とともに兵制改革に着手するなど、維新の大業に尽くした。明治になって官途を断り、清風の事蹟を顕彰したいと毛利家の藩史編纂所に奉職し上京した。このため、梅子も一五歳のとき父に従って東京・高輪の毛利別邸に移り、治療に奔走したが、失われた両足の知覚は再び戻ることはなかった。

たとえ足は不自由でも、何か職を得て自活しなければと、苦勞して芝の頌栄女学校(英語専科)に入學し、手押し車に乗って通學したのである。将来は画家として身を立てようと、十八歳のころから叔父の河北道介、ついで本多錦吉郎に洋画を学んだ。だが、歩行不能から野外写生ができないので、やむをえず日本画に転向し、当時第一人者であった帝室技芸員の野口小蘗女史しのぶめいしに師事して、門下三秀

才の一人と呼ばれた。しかし、不幸にも父の病死（明治三十年、八一歳）、長兄の事業失敗という逆境に再び見舞われ、家庭教師や手内職という辛酸をなめながら絵の修業を続けなければならなかった。

明治三十五年（一九〇二）三一歳のとき、日本美術院展に出品して名声を博し、以後、文展・帝展に入選すること二〇数回、皇室お買い上げも十数回など、日本画界で活躍した。洋画にも長じ、肖像画を手がけている。大正に入つて文展の特選となり、晩年はその審査員に選ばれた。昭和五年（一九一〇）暗香五九歳にして日本美術協会に加入し、女性の身で異例の幹事を引き受け、協会の中心人物になった。画風は典雅な花鳥山水を得意とし、特に梅花・牡丹は神技といわれた。

昭和十九年、東京の空襲を避けて郷里山口に帰り、母の実家である河北家（後河原）で過ごし、終戦の翌年十一月二日に没した。享年七五歳。墓は父子ともに洞春寺にある。

矢原堰を守り抜いた

杉山 誉重

明治十五年（一八八二）〜昭和三十八年（一九六三）。光永源蔵の三男として平川村に生まれ、明治三十五年に大歳村富田原の杉山平吉の養子となる。三〇代の若さで矢原堰の井手総代となり、その一生を堰の保守管理・改良に捧げたのである。

矢原堰は、榎野川（天神川）・仁保川・一の坂川の合流する「出合い」の下流をせき止めて農業用



水を取水するもので、矢原地区のほぼ全域と湯田・吉敷地区の一部にも供給していた。榎野川水系では、小郡の林口堰に次ぐ灌漑面積をもっていた。『風土注進案』（一八四二年報告）にも、「大川筋 羽坂井手長五拾間」「羽坂大溝長千八百五拾六間、幅一丈一寸」とあるが、川幅約九〇メートル、取水口からの幹線水路は三三四メートルに及ぶもので、関係水田は一〇〇町歩に及んだ。

このように重要な堰であったが、当時の堰は、杭打ち方式といつて河床に松の生木の杭を無数に打ち込み、水の流れをせき止める方法だったので、一たび大雨が降ると土砂と共に杭まで流されて用水は枯れ、せつかくの稲が枯死するという有様だった。したがって、その保守管理に当たる井手係の人々の苦労は大変なものだった。杉山誉重は、常に保守・改良に心血を注ぎ、とくに昭和初期の洪水による杭の流失には、不況の中で家事を顧みず再建に奔走した。こうして昭和十年代には念願のコンクリート堰が完成して水害による流失の心配もなくなり、戦争も終わって、安心した杉山翁は総代の職を退いた。

地区の人びとは、四〇年余の永きにわたる翁の功績をたたえようと、顕彰碑の建設が發起され、昭和二十八年二月に「杉山誉重翁頌徳記念碑」が建立された。昭和三十八年三月三日没。享年八二歳。

なお、このコンクリート堰も昭和四十七年の水害で川の流れを阻害したため、可動堰に改めることになり、翌四十八年に現在の矢原堰（可動式）が完成した。

周布 政之助



文政六年（一八二三）〜元治元年（一八六四）。幕末激動のとき、長州にその人ありといわれながら、維新の大業を見ることなく悲運に散った周布政之助。彼は天保末年に藩政改革を推進した村田清風の意志を継いで、革新的政治家として志士を指導し、安政以後の難局に対処した。元治元年（一八六四）の蛤御門の変のち、時局のなりゆきに責任を痛感して上湯田の吉富邸で自刃し、麻田公輔の変名で船田墓地に葬られた。だが、彼は吉田松陰の良き理解者でもあり、その志は久坂玄瑞・高杉晋作・木戸孝允・伊藤博文と受け継がれ、明治維新へと開花したのである。

政之助は萩の江向で出生。名は兼翼、字は公輔、麻田・観山などと号した。家は代々長州藩馬廻役で禄高六八石余。出生後三か月にして父を失い、母に育てられ、明倫館に学ぶ。弘化四年（一八四七）村田清風のめざした藩政改革に参加して蔵元検使補佐となり、その後、明倫館都講・手廻組・江戸方右筆・手元役・政務役などを歴任し、少壮藩吏となる。進歩派で吉田松陰の理解者であった。松陰とは井伊大老の違勅事件のころより疎遠となったが、安政六年（一八五九）松陰刑死後は、公金を支出して松陰の遺骸埋葬を助けている。

安政改革は周布政之助らによって推進されたが、富国強兵に重点を置くもので、軍政改革は洋式操練や農兵（土兵）採用など、西洋技術の採用を積極的に進めた。文久二年（一八六二）長州藩は藩是を「破約攘夷」に転換するが、政之助はこの決意の後に「攘は排也、排は開也、夷（外国）を攘いて後、国開くべし」と書き残している。彼の攘夷論は、攘夷の後は進んで海外の英知を取り入れ、五大州をも圧倒することを目的とする攘夷後開国論であった。したがって、攘夷決行が強く叫ばれた文久三年五月でさえ、政之助は横浜から井上馨・伊藤博文ら五人の青年をひそかに海外留学させるのである。

このころ、江戸にあった高杉晋作らは、英国公使暗殺計画をたてていた。しかし、事前に土佐藩主の知るところとなり、通知を受けた世子毛利元徳は政之助とともに暴挙をやめるよう説得にあたった。このとき、政之助はたまたま居合せた土佐藩士に「藩主山内容堂には攘夷の誠意が見られない」と暴言をはいて大問題となった。世子元徳は土佐藩邸に行つて無礼をわび、政之助を萩に帰して謹慎させることで許しを乞うた。しかし、江戸藩邸の仕事は山積して政之助がいなくては万事を進めることが困難であったから、表向きは「周布政之助」は帰国謹慎ということにして、名前を「麻田公輔」と変名して相変らず江戸藩邸で政務にあたったのである。

文久三年攘夷令がくだると共に帰藩して檄を伝えた。同五月長州藩は下関で外国船に砲撃を加えたが、八月には会津・薩摩両藩によって朝議を一変させる「八・一八政変」が起きた。攘夷派公家は追放され、長州藩は堺町御門の警護の任を解かれ、藩主父子の入京もとめられた。当時、政之助は表番頭で政務役・蔵元役を兼ねていたから、措置を誤まったと責任を問われ、自決しようとして藩主に論され召還されている。

元治元年（一八六四）、藩主の汚名をはらそうと京都へ進発して敗退した「禁門の変」、続いて四国連合艦隊の下関来襲など、長州藩は苦境にたつた。朝敵の汚名をきせられ第一次征長軍を迎えるにあたり、善後策を講じたが、藩内はすでに幕府への「謝罪恭順派」が勢をえて、政之助の意見はいれられなかった。そして、九月二十五日の君前会議で井上聞多（馨）の強硬意見がとおり、藩主は「武備恭順」の断を下したが、その夜、聞多は政治堂からの帰途を反対派に襲われ瀕死の重傷を負った。藩政は謝罪恭順派（俗論党）の手に帰し、なすすべもなかった。藩主から政治堂出仕を命ぜられながら、上湯田の吉富藤兵衛（簡一）邸に閉居して悶々の日々を送っていた政之助は、藩の前途を危惧し、京都進発を阻止できなかったのは自分の責任であると遺書を残し、九月二十六日早朝、吉富邸の裏庭で短刀で喉を突き自刃した。享年四二歳。

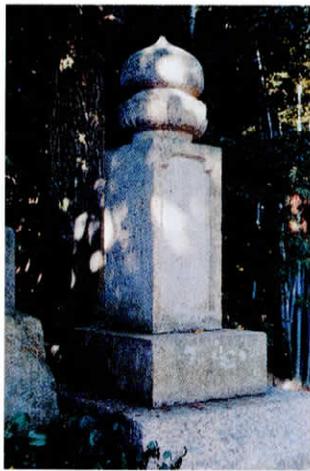
周布町（矢原上湯田）の船田墓地に「麻田公輔」の墓がある。政之助の遺書に、「我が死なばその屍を国の公道の傍に南面して埋めよ。もし敵兵来らば吾が霊が叱咤して退けるであろう」とあったので、その遺命によって建てられたという。明治二十八年正四位が贈られ、明治二十九年の三三回忌には亀山公園に碑が建立された。昭和六年には、墓のある場所を永久に伝えようと、防長の有志によって墓の東側に「嗚呼長藩柱石周布政之助君碑」と題する大顕彰碑が建てられた。今の周布公園である。昭和三十九年には、没後百年ということで百年祭が顕彰碑の前で行われた。（グラビア写真参照）

大乘妙典宝塔を建立した

光澤 即明

生没年不詳（江戸中期の人）。即明和尚は小鯖の禅昌寺で剃髪して仏門に入り、末坊の松梅軒で修行して第八代庵主を継いだ。いったん郷里に身を引き、朝田村和田にあつて久しく無住となつていた慈眼山巨福庵（禅昌寺十世洪基了恩によって開創されたという）という草庵を再興し、修行を続けた。そのかたわら大乘妙経を一石に一字ずつ書き写し、これを埋納するため石塔の建立を思い立った。こうして、黒川村の医師山下玄良（初代）はじめ田中孫左衛門老母など近在の善男善女の寄進をうけて、宝暦七年（一七五七）庵の西側山手に石造五重の「大乘妙典宝塔」を建立した。この石造宝塔は、いつのころからか「子育観音」または「子安観音」と呼んで尊崇され、付近の人びとによって毎年八月十八日に祭りが行われている。

なお、即明和尚の入寂地は明らかでないが、宝塔横の墓地に「当山中興松梅八代光澤即明和尚」と刻まれた墓が現存している。（グラビア写真と本文三七一ページ参照）



即明和尚の墓（和田）

供有橋を架けた

田中平四郎

文久二年（一八六二）〜昭和二十年頃没。若くしてアメリカのハワイに渡り、移民として種々苦勞のすえ成功し、昭和の初めになって日本へ里帰りした。

昭和初年ごろの大歳は、吉敷川に架かる大きい橋といえ、橋詰から古曾坊側に渡る国道の黒川橋（現在の大歳橋の下側）のみだった。現在の供有橋の地点は、旧石州街道から美祢に通じる道で、川を渡るには板東橋とい

う四枚の飛び石で渡っていたのである。したがって、少しの雨でも水没して通行ができず、遠回りをしなければ役場・学校・商店に行けなかったから地区の人達は大変な不便をかこっていた。

ハワイから里帰した田中平四郎は、故郷の人びとが昔のように橋で苦勞しているのを見て、橋を架けることを決意し、昭和八年（一九三三）に私財を投げ出して石橋を架け、「供有橋」と名付けた。七一歳のときである。開通式は盛大に行われたが、地区の人びとは平四郎翁の義挙を未永く後世に伝えようと、大歳村長田中新太郎の揮毫で「田中平四郎翁頌徳碑」を橋の西詰に建立した。

その後、昭和十年の吉敷川改修工事で川幅が二五メートルに広げられ、堤防も高くした。そのため、



頭 彰 碑

供有橋は下湯田橋・千代丸橋・黒川橋・大歳橋と共に新たに鉄筋コンクリートで架橋された。現在の橋は三代目である。

平四郎翁は、日本での滞在が長くなり、日中戦争・太平洋戦争が勃発して、ハワイの娘の許へ帰ることなく日本で没した。

海の名将といわれた

田中頼三



明治二十五年（一八九二）〜昭和四十四年（一九六九）。嘉川の本間源三郎の三男として生まれ、旧制山口中学校（一六期）を経て海軍兵学校（四一期）を卒業。大正九年（一九二〇）に岩富の元大歳村長だった大地主田中善八の養女キクヨと婿養子縁組。昭和七年（一九三二）横須賀鎮守府の首席参謀を振り出しに、第二駆逐艦隊司令、軽巡「神通」艦長、戦艦「金剛」艦長、第六潜水隊司令を経て、太平洋戦争開戦直前の昭和十六年（一九四一）九月に第二水雷戦隊司令に任命されており、生っ粋の艦船乗りである。面長で目が澄み、チョビヒゲのような美髭を蓄え、身長一八〇センチの偉丈夫は、いかにも海軍武人の典型といった感じであった。

同年十二月八日、太平洋戦争に突入。緒戦は各地で勝利をおさめ、東南アジアや太平洋の島々へも

軍隊を進めた。しかし、昭和十七年のミッドウェー海戦で日本連合艦隊は敗れ、太平洋の支配権はアメリカに移った。開戦後の田中第二水雷戦隊は、ダバオ・ホロ島・セレブス島のメナドおよびケンダリン・アンボン・チモール島などの攻略戦に参加、いずれも小規模ながら夜襲水雷戦の極致を見せつけている。

だが、次第に後退していくなかで、ガダルカナル島では日本軍三万人がアメリカ軍の反撃にあつてジャングルに逃れ、やがて二万余の将兵が餓死するという死闘の舞台となつた。すでに制空権を完全に失い、ガダルカナルへの補給は駆逐艦を使わなければならないほど戦局は深刻であつた。昭和十七年（一九四二）十一月三十日夜、田中艦隊（第二水雷戦隊・駆逐艦八隻）は、ガ島ルンガ沖の揚陸地点に到着、夜陰にまぎれて食料・弾薬を詰め込んだドラム缶の揚陸に大わらわの状態であつた。そのとき、敵の大艦隊が真横から接近しているのをレーダーの無い艦隊は知る由もなかつた。敵は最新レーダーを装備する新鋭艦隊で、正面二万一〇〇〇メートルに田中艦隊を捕捉し、攻撃を開始した。田中司令官が先行艦から敵艦発見の報告を受けるより、敵艦の主砲が一齐に火を吹いた方が僅かに早かつた。田中司令官の毅然たる命令が各艦に飛んだ。「揚陸止め、戦闘用意」、続いて「全軍突撃せよ」。戦闘隊形をとるとまもなく、各艦各様に甲板上のドラム缶を投下、終つた艦から全速力で敵の集中砲火をおかして突撃し、魚雷を発射した。敵艦隊の中に火柱が次々に上がり、隊列に大混乱が発生し、戦闘は終わった。この間約一五分、敵五隻の巡洋艦のうち四隻が航行不能の大損害。太平洋戦争を通じて米国が大敗した最後の海戦であつたという。田中艦隊は先行艦一隻を失つたものの七隻は無傷で、

重巡洋艦を含む一一隻という圧倒的に優勢な米艦隊に対し、小よく大を制する水雷戦闘の一典型を太平洋戦史に残した。しかし、戦史などによると田中司令官個人の働きは中央であまり評価されなかつた。先行艦を犠牲にして自らは積極的に戦闘に参加しなかつたという声も聞かれたという。一か月後に解職され、内地に帰還したが、その後海上勤務に復帰することはなかつた。

戦後になつて、田中提督はアメリカの軍事評論家から海の名将として高く評価された。アメリカの雑誌にも、「この戦争中に日本軍に二人の名将がいた。一人は沖繩戦の司令官だつた牛島中将で、今一人はルンガ沖夜戦の田中頼三將軍である」とまで書かれた。だが、本人は「とんでもない。僕は何もしなかつた。ただ突撃命令を下しただけだつた」と語つて、口をつぐむのみだつたという。

岩富の高台にある広い敷地に一〇〇坪余の屋敷、白壁の土蔵、冠木門かぶきもんなど広大な住居は、戦後の困窮を物語るように傷んでいた。ひっそりと暮らす夫妻は、取り子取り嫁で地縁に薄すかつたためもあり、地元の人には恐れ多くて近寄り難い存在であつた。だが、大歳小学校PTA会長（昭和二十七年（三十年）、山口高等学校同窓会会長（昭和四十一年（四十四年））など、地域や母校のために骨身を惜しまなかつた。元大歳小学校PTA副会長だつた村上藤子は、「会長さんは、侵し難い気品と温かみのある方で、会合でも話題を私達のレベルに下げて相手をしていただいた。とても軍人さんとは思えなかつた。」と当時をしのぶ。昭和四十四年七月九日、前年に亡くなつた妻の後を追うように逝去。享年七三歳。岩富の最明寺墓地に葬る。

野村 靖



天保十三年（一八四二）〜明治四十二年（一九〇九）。萩土原に足軽野村嘉伝次の次男として生まれ、通称を和作、後に靖之助といい、字は子共、号は靖録・香夢庵主という。兄杉藏（九一）が入江家に入ったため、和作が野村家を継ぐ。

安政四年（一八六七）冬、松下村塾に十六歳で入門した。彼のすぐれた才能が認められたからであろう、吉田松陰から「和作、和作」とかわいがられたという。安政五年末、松陰の大原卿西下策に密使となり京都で奔走したが果さず、翌年二月、兄に代わり藩主を京へ連れ出そうとする伏見要駕策にも失敗して岩倉獄に投獄される。

万延元年（一八六〇）放免された後も京都・江戸と国事に奔走し、文久二年（一八六二）高杉晋作らと品川の英領事館焼き討ちに参加。翌年一月には攘夷血盟に署名するなど攘夷に尽くした功で士分（三十人通）に取り立てられる。

下関での外艦砲撃や八・一八政変の中で、晋作と行動を共にするが、形勢意の如くならず、山口に帰って七郷の用掛を勤める。この文久三年四月に藩政府の山口移転があり、多くの家臣が萩から山口へ移るが、靖之助（和作）もこのころ山口に屋敷を構えたと思われる。やがて晋作の功山寺決起による内訌戦が始まると、慶応元年（一八六五）に小郡で「庄屋同盟」を組織し、鴻城軍の総管となり、

更に四境戦争には御楯隊を率いて各地を転戦する。

明治政府ができると、岩倉大使一行に随いて欧州諸国に出張し（明治四年）、帰朝後は神奈川県・駅通総監・通信次官・フランス公使、そして内務大臣（同二十七年）、通信大臣（同二十九年）、枢密顧問官を歴任した。この当時、次のようなエピソードがあったと伝えられている。萩に里帰りしたときのこと、懐かしさのあまり松下村塾に泊ると言い出し、町の人々は大臣が泊まられるというので、絹布団を用意して床を取った。ところが、彼は大変機嫌が悪く、「村塾の昔を思うと、こんな贅沢な布団に寝られるか。杉（松陰の実家）に行つてせんべい布団を借りて来い」と言つて、絹布団を放り出したという。貧乏な家に育ち質素な塾の明け暮れを忘れない誠実な人柄に、人々は感激した。

野村靖は明治四十二年六八歳で亡くなるが、その間、藩庁山口移鎮のあった文久のころから矢原村四一番屋敷に居住し、明治二十年（一八八七）五月まで在籍していた。しかし、当時の建物は昭和四十七年の改築で姿を消し、現在面影を残すものは、地区の人々が親しみを込めて呼んでいる「沖の野村」という門名と、樹齢三〇〇年といわれるヤマモモの大木のみである。（上矢原の山根多恵子氏宅が旧居跡）



山田家から養子に行った

林 勇 蔵



文化十年（一八一三）〜明治三十二年（二八九九）。矢原村の山田和吉の四男として生まれ、一四歳で吉敷郡仁保津村（小郡町仁保津）の林家に養子に入る。

山田家は、矢原村上湯田の大庄屋吉富藤兵衛（明治維新に活躍した吉富藤兵衛こと簡一の玄祖父に当る人）が、中矢原の山田酒場を買い受けて三男八左衛門に別家をたてさせたのが始まりである。八左衛門は早世し、四男和吉が相続していた（代替りして昭和五十八年まで吉永酒場があった）。

本家の吉富家は大庄屋を勤める家柄であったから、父山田和吉も矢原村庄屋や宰判（代官所）の恵米方を勤め、寡黙沈着の人だったという。また、本家の伯父吉富惣右衛門の影響も大きなものがあつた。惣右衛門は日頃から「天子を重んじ、農業に務め、儉約を専にし、分に安んじ、親を尊び、身を修め、親族一和し、祖先を辱めず、伝わる田を損なわず」と説いているから、勇蔵も折りに触れてそうした言動に接していたのである。特に、一四歳で養子に入るにあたり、伯父惣右衛門から「祖父藤兵衛は老いても村人のために日夜奔走し、過労がもとで亡くなった。これぐらい庄屋役は大変なものだ。脇差を許された（帯刀御免）」と思いがついていたら家はつぶれる。農民に生まれた以上、農の道を忘

れてはならない」と訓戒され、その教えを心に刻み、謙虚で立派な庄屋になろうと決意したそうである。

以来、庄屋代行から庄屋・大庄屋として、度重なる洪水とたたかい、仁保津墾田と椎ノ木トンネルの造成など郷土の発展に生涯を捧げた。また、幕末維新にあたっては、小郡宰判の一致協力のもとに諸隊を支援し、新時代の到来に決定的な役割を果たした。こうした彼の考えは、二五歳年下の若き日の吉富藤兵衛（簡一）にも大きな影響を与えるのである。

明治になって、地租改正では県下農民の代表として貧富の格差是正をめざし、上に厚く下に薄い累進課税の画期的な税制を提案する。さらに忘れることのできないのは、多くの人に計り知れない恩恵をもたらした榎野川改修である。明治六年（一八七三）に吉富簡一と共に県に申し入れをして以来、幾多の困難を乗り越え、明治二十九年に完成させている（本文一六九ページ参照）。

林勇蔵のすばらしさは、伯父惣右衛門の訓を守り、自分が「農民であること」を忘れず、謙虚さと無私に徹したことであろう。明治三十二年九月二十四日没。享年八十七歳。



小郡町仁保津

オリンピック選手

松村 昶子



大正九年（一九二〇）〜昭和二十年（一九四五）。昭和十一年（一九三六）のベルリンオリンピックといえば、「前畑がんばれ」の名放送で有名であるが、その前畑秀子選手（平泳ぎ）ら日本水泳女子選手団の中に、大歳出身の松村昶子（自由型）がいた。

松村昶子は、矢原高畑の医師松村章の二女として生まれた。昭和二年大歳小学校に入学、榎野川の八光面（石津橋の下で、なぜかハッコウベンと言っていた）で泳ぎを覚えた。当時、榎野川が学校のプールだったのである。五年生の頃から先生の指導で本格的なクロールを習い、「水すましの昶子ちゃん」と言われるようになり、泳ぐ度に記録をのばして皆を驚かせた。

やがて、山口高等女学校に入学、大歳出身の佐伯梅子・溝部文子と共に水泳部の三羽鳥として活躍した。世界記録一分



ベルリンオリンピック女子水泳選手団（ベルリン）
左から4人目松村昶子さん、同7人目前畑秀子さん

〇四秒を目指して頑張った甲斐あって、松村昶子は記録を更新していった。高女四年のとき、東京・神宮プールで行われたオリンピック最終予選会に、一〇〇メートル自由型で一分一六秒八という記録を出し、彗星（すいせい）的スイマーとして候補外から晴れの代表選手に選ばれたのである。この朗報は、大歳村をはじめ山口市民を沸き上がらせた。昭和十一年六月、選手団は関釜連絡船で大陸に渡り、シベリヤ鉄道経由でベルリン入りしたが、松村昶子は残念ながら予選落ちとなり、無念の涙をのんだ。昭和二十年、二五歳の若さで不帰の客となる。

地域の医療と文化を高めた

山下 玄良

宝暦五年（一七五五）〜文化十二年（一八一五）。大歳小学校前の旧国道を小郡方面に南下し、黒川市の町並みを過ぎて左側の田圃の中に四方石垣の旧屋敷跡（約三〇〇坪）がある。ここが昭和初期まで開業されていた山下医院の跡である。その一角に顕彰碑が建っている。碑面に八〇〇字余りがびつしりと刻まれていて、裏面には文化十四年春二月門人黒川玄栄書とある。碑文の内容によると、玄良の死後二年目に門人有志で石材を購入し、三好某の依頼で佐江国融が撰文して、黒川玄栄の書いたものを刻んで建立している。以下碑文によって玄良の偉大な事跡をたどろう。

吉敷郡黒川村岩富に生まれる。父は玄良。諱は天民、幼名を嘉内、後に天民と改め、更に父の名を

継いで玄良といった。号は鹿々斎。祖先は大内氏に仕えたが、その滅亡後は田舎に隠れ住んだ。玄良の祖父玄佑は向学心に燃え、初めて医家になり、父玄良もその業を継いで医家としての名声を博した。幼少より父から医術を授けられ、成人すると京都に出て本草学の泰斗小野蘭山に師事。その間、富森一斎に詩歌を習うなど勉学に努めた。さらに長崎に行き医術の上達を図るとともに、中国人と交遊して中国語を学んだ。

その頃、父が老いたので郷里に呼び戻され、父を助けて医業に励み、父の病没後はその名玄良を襲名した。彼の診療は大変優れており、しばしば難病を治したので、その名は近郊のみならず遠くまで響きわたり、清末藩主や吉敷毛利家からも招かれるようになった。玄良の人となりは「静慎・寡欲・勢利にうすく」營利を追求することはなかった。その頃、藩医としての誘いもあったが、一介の町医者として地域の人々の診療に尽くす道を選んだのである。

診療の余暇には、門人に四書五経や歴史を教え、興に乗っては詩や和歌をつくり、また琴棋書画にも秀でていた。若い頃の玄良は、一夜に百首の和歌を詠んだり、百首の漢詩を作るなど、文芸の道でもすぐれていた。晩年、ある人が戯れに「もう若い頃のように一夜に百首の漢詩を作ることはできない



頭彰碑の残る山下医院跡

いでしよう」と言ったところ、「顔は老いても頭の働きは衰えませんが」と、一夜に百首の五言律詩を作り、丁寧にも一首ごとに要約した和歌を添えて人々を驚かした。

このように文芸に秀でていたが、終生医師であることに誇りを持ち、文芸風流において名のあがることを欲しなかったという。貧者をなおざりにし権門に取り入って蓄財を心がける医家が多いなかで、「医は仁術」と老若男女、貧富の差なく診療に当たった人は珍しかった。

文化十二年十二月十一日、六一歳で逝去。岩富の最明寺に葬られる。墓石には、中央に天民翁先覚玄良居士、右に常樂院法性妙然大姉（先妻）、左に解脱院光瑞妙輪大姉（後妻）とある。

玄良には三男二女があり、男子はいずれも医家として、また文芸においても秀でていた。その三男はのちに萩藩の待医となった高島良台である。そして良台の長男九峰は書家ならびに詩人として優れ、次男は画家として長門峡を探検して世に出した高島北海である。



大橋

矢原將軍といわれた

吉富簡一



天保九年（一八三八）〜大正三年（一九一四）。幕末動乱時代には卓越した軍事的手腕を称賛され、明治維新後は県政の大御所として、長州出身者が中枢を占める明治政府の力強い後盾としての政治的手腕を評価され、「矢原將軍」と呼ばれた人である。

天保九年一月十九日に矢原村に生まれ、幼名を美之助。父は惣右衛門とい、二六町歩の田畑を持つ豪農で代々大庄屋を勤めていた。美之助は親との縁に薄く、十七歳で家督を継ぎ、名を藤兵衛と改め、家計の維持と大庄屋の諸役を勤めなければならなかった。この重責と家庭の不幸が、彼に独立自尊の気概を育てさせた。そして、親類にあたる林勇蔵（四〇六ページ参照）の影響で、尊王攘夷に共感を抱くようになる。二六歳のとき、密航でロンドンに洋行していた井上聞多（馨）が急きよ帰国するが、幼少からの友達だった聞多から国際情勢の厳しさを聞いて攘夷の非をさと、倒幕開国論に転向する。しかしながら、藩内は第一次長州征伐で恭順派（俗論派）が主導権を握って幕府に降り、元治元年（一八六四）九月友の聞多は讃井で刺客に襲われて重傷を負い、藤兵衛は所郁太郎（美濃の人で医師、後に遊撃隊参謀。墓は吉敷上東）と共に看病に当たった。その翌早朝、周布政之助は恭順派の台頭に責任を感じて吉富家で自決し、尊攘派（正義派）は追放されるのである。

こうした情勢の中でも藤兵衛は望みを捨てなかった。

元治元年十二月、高杉晋作が諸隊を率いて挙兵する。晋作から軍資金を頼まれた藤兵衛は金を提供し、翌慶応元年正月の内訌戦には「鴻城軍」を組織した。総勢三七〇人で、井上聞多を総督とし、自らは吉野雪麿と変名して参謀兼会計となり、山口を占領し佐々並に出陣して維新回天に大きく寄与したのである。その後、四境戦争（第二次長州征伐）そして明治二年（一八六九）の諸隊反乱にも功績をあげた。

こうした活躍が木戸孝允に認められ、明治政府になると官途につくことになる。明治三年上京して官吏となり、名を簡一と改める。ついで大蔵省大属となり、井上馨のもとにあつて前途洋々とみえたが、翌四年の廃藩置県で吉富家が藩に貸していた五〇〇〇石余が切り捨てられることになった。家産を失った簡一は、木戸がすすめた岩倉遣欧使節への同行も断り、大蔵省を辞して帰村し、家計再建に努めなければならなかった。

明治七年（一八七四）、下野した井上が先収会社を設立すると、その大阪支店頭取に迎えられた。山口県はじめ各県の米穀の買い入れや堂島相場における投機などに目覚ましい活躍をみせ、実業家としての手腕は高く評価され、矢原將軍の名を高くした。ところが、県内情勢は前原一誠ら不平士族の不穏な動きに加え、全県的な規模で農民運動（地租引当米反対）が拡大していた。県政の再建と反対運動に対処できるのは、簡一以外に無いとの木戸・井上の強い要望により、明治九年夏に簡一は帰郷する。萩の乱は鎮圧されるが、地租引当米反対運動はますます高まっていた。簡一は積極的に活動を

展開し、明治十二年（一八七九）県会が設けられると、県議・初代議長に当選し、防長協同会社の社長も兼ねた。以来二〇年余にわたって県政の大御所として実権を握る。明治十五年には「鴻城立憲政党」を結成し、同十七年には「防長新聞社」を設立して社長になり、同二十一年山口県赤十字社の副支部長に就任するなど地方行政や公共事業に尽くした（その間、矢原村議員・議長・村長を兼任している）。その後、明治二十三年（一八九〇）衆議院議員に当選したが、「山口県のことには吉富にまかせておけばよい」という元老の信頼に依って、生涯地方政治家として活躍し、山口育児院の設立にも尽力するなど福祉事業にも多くの事跡を残している。

大正三年一月十八日没、享年七七歳。墓は船田墓地にある。



朝田古墳群
(朝田トンネルの上部)

名所旧跡